164 ロボトミー後長期間を経た慢性精神分裂病例の脳血流SPECT像

松田博史、久田欣一（金沢大学核医学科）刑部　侃、伊井雅康（厚生連滑川病院精神科）

ロボトミー後長期間（術後39年と36年）を経た慢性精神分裂病２例に所定の承諾書を得たうえでIMPおよびHMPAOによる脳血流SPECTを施行した。その結果、前頭葉皮質で血流よりむしろIMPの停滞能に依存する相対的な活性増加が下方のスライスほどより顕著に両側性に認められ、ロボトミーを受けていない慢性分裂病者で高率にみられた前頭部活性低下と著しい差異を示した。また、両側基底核の活性増加もIMP SPECTで認められた。他方、切載刀の進入部位から離れた左側頭頭頂領域で活性低下がみられ、これらの領域では前頭葉や基底核とは逆に神経細胞の機能低下ないし不可逆的変性が生じていることが考察された。

165 Transient Global Amnesia における脳血流障害の検討—^{123}I-IMP SPECT，MRI及びX線CT所見の比較

中山博文，井坂吉成，芦田敬一，今泉昌利（国立大阪病院循環器科）

一過性全健忘患者に対して^{123}I-IMP SPECTを行い，脳血流分布の最終発作からの経時的変化およびacetazolamideに対する脳血管反応性について半定量的に検討した。発作後早期の症例ではいずれも後頭葉領域において血流低下が認められた。血流の低下傾向は発作直後だけに認められるものと，遷延するものがあった。血流低下域のacetazolamideに対する血管反応性は大部分の症例において保たれていた。SPECTの血流低下域に対応するX線CTやMRI所見のない症例が多いことから，TGA の成因としては可逆的な脳血流低下が重要であると考えられた。

166 アルツハイマー病における^{123}I-IMP 脳SPECTと^{31}P-MRSの比較検討

間島寧興、丹野宗彦、千葉一夫、山田英夫（都老医セ・核放診断科）、成瀬昭二（京府医大・脳外科）、吉越富久夫、大石幸彦（慈恵医大・泌尿器科）

アルツハイマー病の病期判定のため^{123}I-IMP脳SPECTの early-delayedイメージと ^{31}P-MRSの比較検討を行った。earlyイメージでは全例放射能の集積低下が頭頂・後頭・側頭葉移行部に認められたが、PMEsピークの著名な増高（κ値>2）が認められる初期アルツハイマー病では、delayedイメージの同じ部位に軽度放射能増加または不変、PMEsピークの軽度増高（1<κ値<2）が認められる中期では不変、PMEsピークの不変な晩期（κ値<1）では放射能の減少が認められた。以上より、early-delayedイメージは、アルツハイマー病の病期判定の診断に有用な検査方法であると考えられた。

167 大脳皮質病変に伴う同側視床の血流低下

羽生春夫，新井久之，羽田野展由，勝沼英宇（東京医科大学老年科），鈴木孝成（東京医科大学放射線科）

一側中大脳動脈皮質枝領域に限局した脳梗塞例を対象に，^{123}I-IMP SPECTを用い同側視床の血流量に及ぼす影響を検討した。14例中８例に同側視床の有意な血流低下が観察され，前頭葉または頭頂葉皮質を含む梗塞例で認められた。これは病初期のみならず数カ月または数年以上を経た慢性期にも観察され，この中にはＣＴやＭＲＩで視床の萎縮が確認されることも少なくなかった。大脳皮質病変においては，皮質視床間の線維連絡の遮断により同側視床に抑制効果が生じる。これは病初期には血流低下として観察されるが，次第に変性過程を経て肉眼的萎縮に至る不可逆的影響と考えられた。

168 脳炎患者における脳血流測定

森田浩一、小野志磨人、福永仁夫（川崎医大核医学）中北和夫、小濱啓次（川崎医大救急医学）舟川　格、寺尾　章（川崎医大神経内科）

近年、ヘルペス脳炎の診断や、経過観察における脳血流シンチグラフィの有用性が報告されている。今回我々は種々の脳炎患者4例に^{123}Ｉ-IMPおよび^{99m}Tc-HM-PAO SPECTを行い、2例については局所脳血流の定量を行ったので報告する。ヘルペス脳炎1例では、病初期から側頭葉を中心にrCBFの高値が認められた。一方、他の脳炎患者では大脳半球の血流は広範囲に旦り低下を示した。原因不明の脳炎でけいれん発作が頻発している患者では、両側大脳半球の広範囲な血流低下が示されたが、てんかん焦点を示唆する高集積部は認められなかった。このように、脳血流シンチグラフィは各種脳炎患者の診断および経過観察に有用であると思われた。

169 脳炎における脳血流シンチグラフィ

伊藤邦泰（佐久総合病院放射線科）
曽根脩輔、中西文子、小口和浩、春日敏雄（信州大学医学部放射線医学教室）

臨床症状と髄液検査からウィルス性脳炎と診断された３例に^{123}Ｉ－ＩＭＰによる脳血流シンチグラフィを施行した。原因ウィルスは特定できなかった。初回検査にて３例に基底核を中心とする高集積が認められた。２回目の検査では、２例においては、高集積は消失し、これらにおいては臨床症状も改善していた。残りの１例では、高集積は限局性に残存し、臨床症状の改善も乏しかった。ＣＴ検査では３例中の１例にびまん性の脳腫脹像が認められたが、残りの２例では異常所見は認められなかった。脳血流シンチグラフィの方が、臨床症状と関連性して所見を示しやすいことが判った。従って脳血流シンチグラフィは、脳炎において、有用な検査と考える。

Presented by Medical*Online